



Title	『伊勢物語肖聞抄』における作者説：注釈との関わりをめぐって
Author(s)	渡部, 真由
Citation	詞林. 2010, 47, p. 16-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『伊勢物語肖聞抄』における作者説

——注釈との関わりをめぐつて——

はじめに

『伊勢物語』の注釈史において、鎌倉時代から南北朝時代の注釈が古注と呼ばれるのに対し、『伊勢物語愚見抄』（以下「愚見抄」とする）を嚆矢とする室町時代中期から後期にかけての注釈は旧注と呼ばれている。本稿で扱う『伊勢物語肖聞抄』（以下「肖聞抄」とする）は、これらの分類では旧注に属する注釈書である。『肖聞抄』は宗祇の講釈を弟子の肖柏が聞書したものであり、「その殆どが宗祇の説の祖述に終始してゐて、肖柏自身の解釈と見られるものは至つて少い」と言われるよう、宗祇の説を良く伝える書である。そのため、これまでにもたびたび注目され、その特色が明らかにされた。なかでも大きな特色とされているのは、「幽玄によみなす」という意識に基づいた、独自の注釈を施していることだろう。すでに多く指摘されていることからわかるように、「幽玄」は『肖聞抄』の根本に関わる重要な理念である。しかし、そのような「幽玄によみなす」という意識のほか

にも、『肖聞抄』には、他の注釈書とは異なった意識を持っている面が見られるようである。そこで本稿では、従来の指摘とは異なる『肖聞抄』の特色の一つとして、『伊勢物語』の作者に対する考え方（以下これを“作者説”と呼ぶ）を取り上げたいと思う。なぜなら『肖聞抄』がどのような作者説を持ち、その作者説が注釈とどのような関わりを持つのかを把握することは、『肖聞抄』の注釈を理解するうえでも重要だと考えられるためである。

渡部 真由

一、作者説の相違と注釈

『伊勢物語』の作者に対する考え方は、注釈書によってさまざまである。たとえば冷泉家流古注に属する『十巻本伊勢物語注』（以下「十巻本」とする）の場合、次のように述べている。

一　『伊勢物語』ノ就名字、アマタノ説侍リ。先、イセ
齋宮ノ事ヲ始ニ書リ。又、業平自筆之本ハ、伊勢ガ中書
之本ヨリ後ニ、業平此物語ヲ作テ、二男ノ滋春ニ相伝ス。

今、当流相伝ノ本也。

(『十巻本』冒頭)

『十巻本』は冒頭の序に当たる部分において、「当流相伝ノ本」は業平自筆の本だと述べ、業平がこの物語を作ったのだとしている。『十巻本』は『伊勢物語』の作者を、在原業平と考えているのである。

また、『愚見抄』の場合は次のように述べている。

此物語の名（字）につきて、伊勢が書たるといふ説あり。又在五中将身づからおのが事を昔の事に書なしたるといふ説あり。両説いまだ一決せず。〔『愚見抄』冒頭〕『愚見抄』は、作者を伊勢とする説と業平とする説があることは指摘するものの、断定はしていない。このことから、『愚見抄』は作者を特定していないことがわかる。

それでは、『肖聞抄』の場合などのように考えているのだろうか。『肖聞抄』は冒頭で、次のように述べている。

一、伊勢物語といへるは、業平狩使に伊勢にくだりし時、斎宮にあひ奉し事、此物語の肝心たり。よて此名ありと云儀あり。是を信ずる輩、結句狩使の事を端に書る本あり。定家卿皆被破之。忽而此物語の作者事、古人の説不^同也。或は業平自記と号し、或は伊勢といへる女の書る由見えたり。仍定家卿も難決之由、奥書在之。しかはあれど、非彼筆作者何称伊勢乎と侍れば、黄門の心も、伊勢が作をもて、此物語の題号とすと見えたり。されば當流用之。

(『肖聞抄』冒頭)

『肖聞抄』はまず、『愚見抄』と同様に、作者を業平とする説と伊勢とする説があることを指摘している。そして定家の奥書を踏まえたうえで、「当流」では伊勢とすると述べている。『肖聞抄』は『伊勢物語』の作者を、伊勢と考えているのである。

すでに指摘されているように、『肖聞抄』には兼良の説を受け継いでいる面が見られる一方で、冷泉家流古注の説と連続している面も見られる。⁽⁶⁾しかし作者説に関して言えば、『肖聞抄』は『愚見抄』や『十巻本』とは全く異なった考え方をしているのである。作者を伊勢としているということは、『肖聞抄』の大きな特色の一つなのである。

このように、作者に対する考え方は注釈書により異なつてゐるのだが、作者説の相違は注釈にも現れている。一例として、百十四段を見たい。

百十四段は芹河の行幸を描いた章段であり、この行幸は、史実のうえからも業平没後に行われたことが明らかになってゐる。

この百十四段について、『十巻本』は次のように述べている。

一 仁和ノ御門セリ川ニ行幸シ給トハ、光孝天皇、仁和元年ニ御即位、五十余年。(中略) 芹河ノ行幸ハ、仁和二年十二月十四日也。供奉ニハ、行平、高経、滋春等也。業平滅後ノ事也。業平、元慶四年五月廿八日ニ卒シケル

時、アマタノ子アリトイヘドモ、滋春ニ、和歌好色ノ二ノ道ヲ伝フ。此物語ヲ、長カラヌ命ト云マデ、清書シテ死ケレバ、滋春、次ニセリ川ノ行幸ノ物語ヲ入テ、ソノ奥ニ業平ノ草案ニ任テ、業平ノ事ヲ書入タリ。

(『十巻本』百十四段)

『十巻本』は、百十四段以降の章段は、業平の草案をもとに滋春が書き入れたのだと述べている。

作者を業平と見なす場合、業平没後の出来事を業平が記したと考えることはできない。そのため作者説と物語の間で齟齬が起きないよう、滋春が書いたという解釈がなされたのだと推測される。つまりこの『十巻本』の注は、作者を業平とする作者説に基づいて付された注だと考えられるのである。

それでは作者を特定しない『愚見抄』の場合は、どのような注を付しているのだろうか。

むかし仁和の御門、芹河に行幸し給ふける時、

此事は、業平中将卒去の後の事也。此物語にはあるまじき事なるを、おほくの本にのせたれば、いまさらのぞくに及ばず。伊勢が書たるといふは、これらの証拠についてふこと也。仁和の御門は、光孝天皇を申。仁和二年十二月十四日、芹河に野行幸ありしなり。

(『愚見抄』百十四段)

『愚見抄』は、芹河の行幸が業平没後にに行われているという事実から、本来百十四段は『伊勢物語』にあつてはならぬ

い章段だと述べている。また作者説に関しては、作者を伊勢とする説の根拠がこの章段にあることをのみ、指摘している。これらのことから、『愚見抄』の場合は作者説ではなく、歴史的事実に基づいて注を付していると言えるだろう。

それならば、『肖聞抄』はどのような注を付しているのだろうか。

むかし仁和の御門、此段業平没後の事也。仁和二年芹河行

幸御狩也。定家卿奥書に、此段の事見えたり。在原氏の事なれば書加たる也。伊勢が加たるなるべし。仁和御門、光孝天皇。仁明第七御子。芹河行幸は嵯峨天皇行幸例也。さがの山みゆきたえにしの歌も、仁和二年行幸の時の哥也。

(『肖聞抄』百十四段)

『肖聞抄』は百十四段について、在原氏が関わる出来事であつたために、伊勢が書き加えたのだと述べている。つまり、作者が伊勢であることにに基づいて百十四段も伊勢が書いたのだと考え、このような注を付しているのである。

以上のように、作者を特定する『十巻本』や『肖聞抄』の場合、作者説に基づいてそれぞれ異なった注を付している。また、作者を特定しない『愚見抄』の場合は、歴史的事実に基づいて、やはり他の注釈書とは異なった注を付している。どのような作者説を持つかということは、どのような注釈を施すかということと連動しているのである。

この百十四段の例からは、作者説が、注釈に大きな影響を

与えていることがわかるだろう。作者説と注釈は、密接な関わりを持っているのである。

二、作者説と〈伊勢が詞〉

前節では作者説と注釈が関わりを持つことについて述べたが、『肖聞抄』には、百十四段のように、作者説に基づいて付されたと考えられる注がほかにも見られる。それが、次に挙げる〈伊勢が詞〉である。

『伊勢物語』には、作者が物語の前面に出で述べていると思われる箇所が複数見られるのだが、そのような作者の評言と思われる箇所に対し、『肖聞抄』は〈伊勢が詞〉という注を付している。

あまれりやたらずや、伊勢が詞也。若やなれば、ゐ中人
とかぎり。批判する詞也。すこしさし過たるさまなり
と思ふこゝろにや。
（『肖聞抄』八十七段）

八十七段は、蘆屋の里に住む男のもとに集つた人々が、布引の滻を見に行く様子を描いた章段である。その後半では、滻から帰つた一行に對し海松が差し出されるのだが、その際の様子は『伊勢物語』では次のように描かれている。

むかし、男、津の国、菟原の郡、蘆屋の里にしるよし
して、いきてすみけり。（中略）つとめて、その家の女
の子どもいでて、浮き海松の浪に寄せられたるひろひて、
家の内にもて来ぬ。女方より、その海松を高杯にもりて、
述べている。

かしはをおほひていだしたる、かしはにかけり。
わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためには
をしまざりけり

（『伊勢物語』八十七段）
『肖聞抄』は、「わたつみの」の歌に對する「ゐなか人の歌にては」について、「伊勢が詞」であり「批判する詞」などだと述べている。

同様の注は、九十段にも見られる。

むかし、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あ
はれとや思ひけむ、「さらば、あす、ものごしにても」
といへりけるを、かぎりなくうれしく、またうたがはし
かりければ、おもしろかりける桜につけて、
桜花今日こそかくもにほふともあな頼みがた明日の

夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

（『伊勢物語』九十段）

九十段では男が女に歌を贈るのだが、その男の歌に對して、本文には「といふ心ばへもあるべし」とある。この言葉について『肖聞抄』は、

といふ心ばへも有べし、上の歌の心を尺したる伊勢が詞
也。
（『肖聞抄』九十段）
と、伊勢が「桜花」の歌に注釈を加えて書いた言葉なのだと述べている。

このように『肖聞抄』は、作者の評言と思われる箇所に対し、〈伊勢が詞〉という注を付している。作者の評言を、伊勢の評言と捉えているのである。これは、作者を伊勢と見なしていなければ成立し得ない捉え方である。このことから、『肖聞抄』は作者説を踏まえたうえで、〈伊勢が詞〉と付していると言えるだろう。

ところで、〈伊勢が詞〉と同様の注は、『愚見抄』にも見られる。しかし『愚見抄』の場合には、

むくつけき事人ののるふ事はおふ物にかあらんおはぬ物にやあらん、いまこそはみめとぞいふなる。

これより（は）物語の作者の詞也。むくつけきは、蠢の字をかく。（下略）

と、〈物語の作者の詞〉という表現が使用されている。

『愚見抄』が、作者の評言と思われる箇所に対し、固有名詞をあてる注を付していないのは、『愚見抄』が作者を特定していなかったためだと考えられる。とするならば、『肖聞抄』における〈伊勢が詞〉という表現も、作者を伊勢と見なしていることから使用された表現だと考えるべきだろう。『愚見抄』の例と比較してみても、やはり、〈伊勢が詞〉は作者説に基づいて付された注だと考えられるのである。

さらにも、作者説と関わりを持つ〈伊勢が詞〉という注は、実は、次のような『肖聞抄』独自の解釈を支える基盤にもなっている。

時代へ久しく成にければ、伊勢が詞也。官位のいやしきをいたはりて書る也。王舎を出て三代なれども、それともなき心也。又それまでもなく如此書も有べし。

（『肖聞抄』八十二段）

右に挙げたのは、八十二段の注である。八十二段は水無瀬の離宮での桜の宴を描いた章段であるが、その冒頭では、

むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しく述べれば、その人の名忘れにけり。

（『伊勢物語』八十一段）

と、男の名前がさも忘れられたかのよう書かれている。これについて『肖聞抄』は、業平が親王の子でありながら官位が低いことを、伊勢が「いたはりて」書いたのだと述べている。「時世経て」の一文が〈伊勢が詞〉であることを踏まえたうえで、さらに今度は、〈伊勢が詞〉から伊勢の心情を読み取っているのである。

同様の例は、三段にも見られる。

三段は、男が思いを寄せた女に歌を贈るという章段だが、その末尾には登場する女の正体を明かす一文が付されている。むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには
袖をしつつも

二条の后の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人に
ておはしましける時のことなり。〔伊勢物語〕三段)

この傍線部について『肖聞抄』は、

二条の后のまだ御門にも、伊勢が書る詞なるべし。業平

の所行をたすけて、たゞ人にての時と書ると云々。又

女御以前のことにもや侍らん。〔肖聞抄〕三段)

と、〈伊勢が詞〉であることを指摘したうえで、伊勢が「業

平の所行をたすけて」書いたのだと述べている。ここでも

『肖聞抄』は、〈伊勢が詞〉から伊勢の意図を読み取っている

のである。

以上のように、『肖聞抄』は〈伊勢が詞〉から、そこに込

められた伊勢の心情や意図を読み取っているのだが、このよ

うな解釈は、『十巻本』や『愚見抄』には全く見られない

『肖聞抄』独自のものである。

たとえば先の例と同じ三段の注を見てみると、『十巻本』

の場合は、
一 ヒジキモノトハ、海草ヲ云也。(中略)或人ノ義ニ
ハ、葎ノ宿トハ、六条ノ御所ヲ云。引敷物トハ、文コマ
カナルニシキト云リ。サレバ、六条殿ニ、文コマカナル

錦ノ茵ヲ敷テ、ネバヤト読ト云リ。難云、恋ハ、思ナク
トモ、ヌベシ。只、イカナラン所ナリトモト、イハンコ

ソ、志ノ切ナル至ニテアレバ、葎生テ、荒タル宿ニモ、
ネント云。コレ実義也。〔十巻本〕三段)

と、「二条の后の」の一文には全く触れていない。
また、『愚見抄』の場合は、

二条の后のまだ御門にもつかうまつりたまはでたゞ人に
ておはしましける時の事なり。

物語の作者其人をかきあらはしたる詞也。二条后、名

は高子。中納言藤原長良卿の中女也。貞觀八年十二月

女御に立給ふ。(中略)たゞ人にておはしますとは、

貞觀八年よりさきの事をいへり。〔愚見抄〕三段)

と、〈物語の作者の詞〉であることを指摘した後は、史実に

のみ言及している。

『十巻本』の場合、『伊勢物語』の作者を業平と見なしてい

る。そのため、伊勢が業平を「いたは」つたり、「たすけ」

たという解釈をするのは不可能である。

また、作者を特定しない『愚見抄』の場合は、基本的には

歴史的事実に基づいて注を付しており、作者説を踏まえて物

語を解釈しようとはしていない。よって、〈物語の作者の詞〉

から、さらに作者の心情を読み取るような解釈をすることは

ない。

このように『十巻本』や『愚見抄』の場合、それぞれ異

なった作者説に立っているために、『肖聞抄』のような解釈
をすることはない。逆に言えば『肖聞抄』の場合は、作者を

伊勢とする作者説に基づいて注を付しているために、先のような解釈がなされているのである。『肖聞抄』独自の解釈は、作者を伊勢とする作者説と、それに基づいて付された「伊勢が詞」という注があつてはじめて成り立つ解釈なのである。

『肖聞抄』の作者説は、『十巻本』や『愚見抄』とは大きく異なっているのだが、そのように他の注釈書とは異なった作者説が、結果として『肖聞抄』独自の解釈をも支えているということは、注目すべきことだと言えるだろう。

三、作者説と〈業平自書の詞〉

ところで、『肖聞抄』が「伊勢が詞」から、業平を「いたは」つたり「たすけ」て書いたのだという伊勢の心情を読み取っているということは、とりもなおさず、『肖聞抄』が伊勢のことを、業平を尊重し、擁護するような人物と捉えていことを示している。⁽¹⁵⁾しかし伊勢をそのような人物と捉えたうえで『伊勢物語』を読もうとすると、齟齬が生じる場合もある。

七十七段を見てみよう。

むかし、田畠の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すみまそがりけり。それうせたまひて、安祥寺にてみわざしきり。人々ささげ物奉りけり。奉り集めたる物、千ささげばかりあり。そこばくのささげ物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山も

ささらに堂の前に動きいでたるやうになむ見えける。それを、右大将にいまそがりける藤原の常行と申すいまそがりて、講の終るほどに、歌よむ人々を召し集めて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせたまふ。右の馬の頭なりけるおきな、目はたがひながらよみける。山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

とよみたりけるを、いま見ればよくもあらざりけり。
のかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。

（『伊勢物語』七十七段）

女御の法要の際、「右の馬の頭なりけるおきな」は歌を詠むのだが、その歌について、本文には「いま見ればよくもあらざりけり」とある。これは八十七段と同様、作者の評言と捉えられる箇所である。しかしその内容は、『肖聞抄』が想定するような伊勢が書いたとは考えられない、「おきな」の歌を貶めるものである。

こういった箇所に対し、『肖聞抄』はどのような注を付しているのだろうか。

今見ればよくもあらざりけり、此詞業平の自書と見えた
（『肖聞抄』七十七段）

『肖聞抄』は、「いま見ればよくもあらざりけり」という言葉は、「業平の自書」なのだと述べている。この箇所に関しては、「伊勢が詞」ではなく、業平自身が書いた言葉だと捉

えているのである。

同様の注は、八十一段にも見られる。

かたいおきな、かたくなしき翁と云心也。業平自書の詞なるべし。

（『肖聞抄』八十一段）

八十一段は、賀茂河のほとりの邸における秋の宴の宴の様子を描いた章段である。ここでも男は歌を詠むのだが、その際に男は「かたゐおきな」と呼ばれている。しかし業平を尊重するはずの伊勢が、そのように業平を貶めた呼び方をするとは考えられない。それゆえに『肖聞抄』は、〈業平自書の詞〉と述べてているのである。

このように、『肖聞抄』は業平を貶めるような記述に対し、

〈業平自書の詞〉という注を付している。なぜなら『肖聞抄』にとって、伊勢は業平を重んじる人物なのであり、そういう人物を作者とする以上、業平を貶めるような記述を、伊勢が書いたと考えることはできないためである。このことから

は、〈業平自書の詞〉が、伊勢が書いたとは考えられない箇所に対する、例外的な措置として付された注であることがわかるだろう。〈業平自書の詞〉は、〈伊勢が詞〉と表裏一体の注なのである。

前述したように、〈伊勢が詞〉は作者を伊勢とする作者説に基づいて付された注である。そのことを踏まえるならば、〈伊勢が詞〉と表裏一体の関係にある〈業平自書の詞〉についても、広くは作者説に基づいて付された注だと言うことが

できるだろう。

さらにまた、〈業平自書の詞〉が〈伊勢が詞〉と表裏一体であるということを念頭に置くならば、次のような注についても、作者説に基づいて付された注だと考えることができる。

さる歌のきたなげさよ、卑下也。

（『肖聞抄』百三段）

右に挙げたのは、百三段に付された注である。百三段は、親王たちから寵愛を受けていた女に男が歌を贈るという話だが、その男の歌に對して本文には、詠まれた思いの見苦しさに言及する記述が見られる。

むかし、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちのつかひたまひける人をあひいへりけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

となむよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。

この、業平を貶めるような記述に対しして『肖聞抄』は、「卑下」なのだという注を付している。

また八十四段の冒頭では、男について「身はいやしながら、母なむ宮なりける」と述べられているのだが、『肖聞抄』はそのような記述に對しても、

むかし男有けり。身はいやしながら、卑下詞也。

（『肖聞抄』八十四段）

と、「卑下」の言葉なのだという注を付している。

これらの注は、一見すると作者説とは無関係に見える注である。しかし次のような注を介すると、実は作者説と関わりを持つているということがわかる。

今みればよくも、業平卑下也。　（『宗長聞書』七十七段）

右に挙げたのは、『肖聞抄』と同じく宗祇の説を伝える、宗祇の講釈を宗長が聞書した『宗長聞書』である。

先に引用した七十七段の「いま見ればよくもあらざりけり」について、『宗長聞書』は、業平の「卑下」なのだと述べている。これは、『肖聞抄』の百三段や九十三段と同様の注である。

この『宗長聞書』の注を、先の『肖聞抄』七十七段の注と合わせて考えるに、業平を貶めるような記述に対する「卑下」とは、業平が卑下し、自らを貶めてわざとそのように書いた〈業平自書の詞〉を指すのだと思われる。つまり、「卑下」とは〈業平自書の詞〉なのである。⁽¹⁵⁾

以上のことから、業平を貶めるような記述に対する「卑下」についても、〈業平自書の詞〉と同様のことが言えるだろう。すなわち「卑下」もまた、〈伊勢が詞〉と表裏一体の注であり、広くは作者説に基づいて付された注なのである。『肖聞抄』には、作者説とは無関係に見えながら、背後では繋がりを持っているという注が見られる。このことは、作

者説が『肖聞抄』の注釈に通底していることを示している。第一節では作者説と注釈が関わりを持つことを指摘したが、『肖聞抄』の場合、作者説と注釈は不可分なのであり、他の注釈書と比べても特に密接な関わりを持つているのである。

おわりに

本稿では、『肖聞抄』がどのような作者説を持ち、その作者説が注釈とどのような関わりを持つのか、考察を試みた。

作者に対する考え方の相違が注釈に現れていることからわかるように、作者説と注釈は密接な関わりを持っている。とりわけ『肖聞抄』の場合は、作者説に基づいて付されたと考えられる注は複数見られ、それらの注のなかには、独自の解釈を根底から支えているものも存在する。また、一見すると無関係に見えながらも、実は作者説に基づいているという注も見られ、作者説が注釈の基盤となっていることが指摘できる。

このような作者説と注釈の関わりからは、『肖聞抄』において、作者説が非常に重要な役割を担っていたことがうかがえるだろう。作者説は、『肖聞抄』の注釈の根幹をなすものの一つであり、『肖聞抄』の注釈を理解するための鍵ともなり得るものなのである。

注

(1)引用は、片桐洋一氏著『伊勢物語の研究』[資料篇]（一九六九年 明治書院）による。

(2)引用は、片桐洋一氏著『伊勢物語の研究』[資料篇]（前掲）により、他系統の本文との間に大きな異同がある場合のみ、適宜、注を付す。なお、文明九年本系統のテキストには、片桐洋一氏編『伊勢物語古注釈書コレクション 第二巻』（一九〇〇年 和泉書院）を、延徳三年本系統のテキストには、片桐洋一氏・山本登朗氏責任編集『伊勢物語古注釈大成 第三巻』（一九〇八年 笠間書院）を使用している。

(3)大津有一氏著『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』（一九八六年 八木書店）第一章第四。

(4)山本登朗氏「伊勢物語の「誹諧」—宗祇の注記をめぐって—」[伊勢物語論 文体・主題・享受]（一九〇一年 笠間書院）所収。

初出は『論集 日本書・日本語 2』（一九七七年 角川書店）、青木賜鶴子氏「室町後期伊勢物語注釈の方法—宗祇・三条西家流を中心にして」（『中古文学』第三四号 一九八四年十月）、同氏「伊勢物語旧注論序説—一条兼良と宗祇と—」（『女子大文学』第三七号 一九八六年三月）、大谷俊太氏「業平像の変貌—伊勢物語旧注論—」（人間文化研究機構国文学研究資料館 普及・連携活動事業部 編『展開する伊勢物語』一〇〇六年三月）、同氏「余情と倫理と—伊勢物語旧注論余滴—」（『叙説』第三三号 一〇〇六年三月）、海野圭介氏「幽玄に読みなす物語—『肖聞抄』における『伊勢物語』の読み解きをめぐって—」（山本登朗氏・ジョン・ア・モストウ氏編『伊勢物語 創造と変容』（一九〇九年 和泉書院））に詳しい。

(5)引用は、片桐洋一氏編『鉄心斎文庫 伊勢物語古注釈叢刊 第一巻』（一九八八年 八木書店）による。なお、私に翻刻し、適宜、句読点・濁点を付した。

(6)青木賜鶴子氏の前掲注4の一論文、山本登朗氏「ふたつの「芥川」—室町中期伊勢物語注釈の虚構理解—」（『伊勢物語論 文体・主題・享受』（前掲）所収。初出は『国語国文』六五巻四号 一九九六年四月）、田村航氏「宗祇の古典研究—一条・冷泉両派からの学の継承と展開—」（『学習院大学文学部研究年報』第四八号 一九九一年三月）。

(7)本稿では、『肖聞抄』における「伊勢が詞」に類似する言い回しを、総称して〈伊勢が詞〉とする。

(8)『源氏物語』における、いわゆる「草子地」のような箇所を指す。

(9)引用は、『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（福井貞助氏校注・訳（一九九四年 小学館）による。

なお、必要に応じ、適宜傍線を付したところがある。

(10)本稿では、『愚見抄』における「物語の作者の詞」に類似する言い回しを、総称して〈物語の作者の詞〉とする。

(11)文明九年本・延徳三年本には、「又それまでもなく如此書も有べし。段々さま／＼也。」の部分が見られない。宗祇自身の解釈の搖れと見るべきかと思われるが、肖柏や後の書写者による書き落としの可能性も残る。

(12)青木賜鶴子氏は前掲注4の論文「室町後期伊勢物語注釈の方法—宗祇・三条西家流を中心にして」において、宗祇・三条西家流の注釈について、「色好み業平」から“憐愍する業平”への変貌は、主人公の理想性の変化であると同時に、それまでは注目されてい

なかつた相手の女の立場に細かい配慮を示すようになったことを意味している」と述べ、紀有常女が「貞女」とされていることを指摘しておられる。『肖聞抄』において伊勢が業平を大切にすることを人物とされていることも、そのような配慮と関連性を持つと思われる。なお、『肖聞抄』の五段には「染殿后、心にすこし業平をいたはり憐愍し給ふやうなる心也」という注も見られ、他の女性についても、業平を「いたはる」人物像が読み取られていることがうかがえる。

(13) 本稿では、「業平自書の詞」に類似する言い回しを、総称して〈業平自書の詞〉とする。

(14) 引用は、片桐洋一氏著『伊勢物語の研究「資料篇」』(前掲)による。

(15) なお、「卑下」と業平の関わりについては、すでに大谷俊太氏による御指摘がある。大谷氏は前掲の「業平像の変貌—伊勢物語旧注論」において、『肖聞抄』における業平像に注目され、「自らを卑下し、相手を思い遣り、憐れむ、そういう人格者としての業平が登場する物語、それが宗祇にとっての「当流の本意」を顕した伊勢物語であった」と述べておられる。しかし、〈業平自書の詞〉と「卑下」の関わりについては、特に言及されていない。

(わたなべ・まゆ 本学大学院博士前期課程修了)